

茨城県産の木にこだわり
家を建てています
木が本来もつ
柔らかさと温もりで
優しく包み込みます

農と食
の邂逅

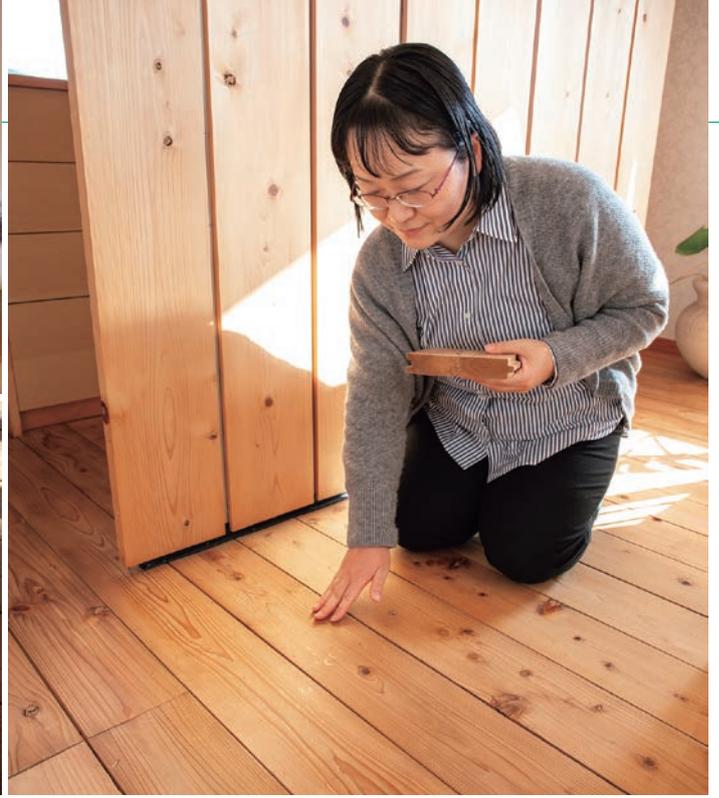
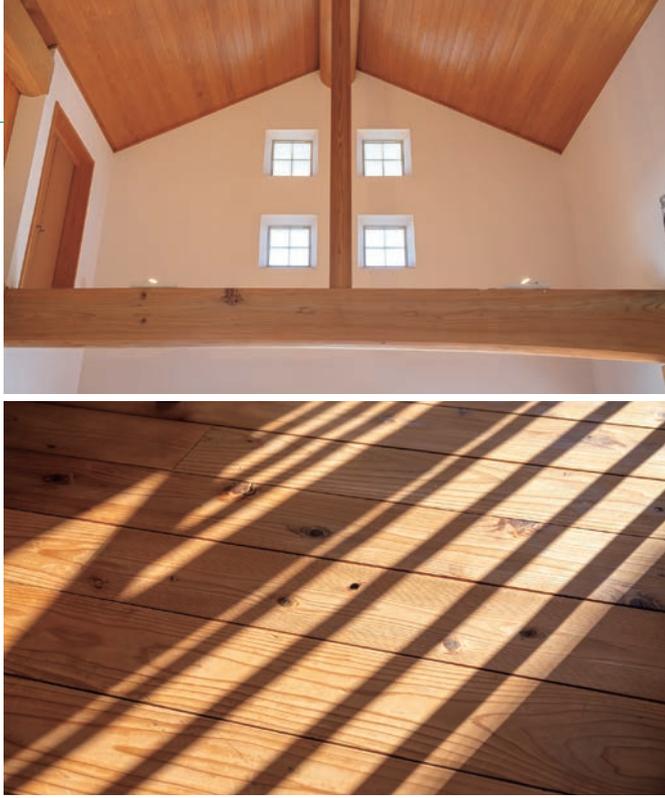
杉山 絵美 さん

茨城県つくば市

株式会社茨城県南木造住宅センター 設計課

茨城県産のスギ、ヒノキを用いて無垢の家
を建設。木そのものが持つ断熱性や調湿性
による快適さや経年変化による色味の変化
を伝えています。「いばらき森林ガール」と
して県産材の魅力を発信しています。





P19:工事中の現場で。スギの外壁は、こんなにもすがすがしく美しい
P20:柱、梁、天井にも無垢を使っている木の家(左上) 2階寝室で。杉山さんが手にするのは厚さ30ミリの床見本。こんなに厚い!(右) 柔らかい陽ざしにほっこりするスギのフローリング(左下)

スギの柔らかさを知る

国産材、それも茨城県産のスギとヒノキを使って家を建てるメーカーがあると聞いて向かった先は、学園都市のつくば市。「いばらきの家」とよぶモデルハウスで、株式会社茨城県南木造住宅センターが手掛ける木の家だ。

がっしりしたスギの扉を開けて中へ入ると、大きな吹き抜けの空間が広がっている。組み込まれた木の柱や梁が、あたかも確かな骨格のように目に飛び込んできた。床はもちろんのことだが、天井一面にも木を貼ってあるのが何やら新鮮で、木の家の味わいが伝わる。

靴を脱いで入ると、じんわり温かい。床暖房をしてあるという。

「えっ、無垢なのに床暖房をしても大丈夫なのですか?」

「通常、スギ・ヒノキの床材は、30ミリの厚の無垢板を標準仕様としていますが、この床は床暖房対応のヒノキ無垢材を採用しています。このモデルハウスは15年経ちますが、床板の反りも割れもありません」と説明してくれたのは、設計課に勤務する杉山絵美さん(44歳)。

フローリングにスギを使っているのは、2階の寝室だという。2階に上がると、陽がさんさんと差し込んで無垢のフローリングに美しい影をつくっている。スギならではの丸い木の節が幾つかある。模様のように

も見えるし、まるで木の顔のようにも見える。15年という時間の経年変化がもたらしたもののだろうか。床全体から優しい木の温かさが感じられて、思わず手触りを確かめたくなった。

「スギは軽くて柔らかい特性を持っているので、傷がつきやすい一面もあるのですが、素足で歩くととても気持ちがいいので、靴を脱いで上がる日本の家の床材に向いていますね」

確かに肌ざわりは抜群だ。起床して、ベッドから床に足をおろしたときは、さぞ気持ちがいいことだろう。

「ほかの木材より空気を多く含んでいるため、柔らかくて温かみがあるのが特徴なんです。スギの無垢フローリングでは、お子さまがたいいてい大の字になって寝ころびます。『スギにしてよかったな』と、私もうれしくなります」と杉山さん。

杉山さんは、入社12年。以前は、まったく畑違いの仕事だったという。

「入社直後は、専門用語が飛び交う会話についていけず戸惑いました」と笑う。

昨年は伐採現場にも出向き、チェーンソーを入れる瞬間から立ち会った。

「徐々に木が傾き、バリバリと枝が折れて倒れる音の迫力がものすごかったです。地に倒れた瞬間に、強烈な地響きがありました。お腹というか、体中に響き渡るような音でした」

その時、山主が語った言葉が、今も杉山さ



プレカットされた柱材(左上) スギ材を触って丁寧に確認する(右上) 杉山さんが担当した建築模型を前にスタッフと打ち合わせ中(下)

んには鮮烈に残っている。
「自分が植栽して育てた木を伐採するの
を目にすることはできない」と。

スギ・ヒノキは、植樹後、山の状況に合わせ
て主伐し、用途に合わせた長さの丸太に
生産される。適切な伐期は、50〜100年。
そのため、子や孫の代にならないと伐採は
できない。伐採後には、次の世代につなぐた
め苗木を植える。その枝葉に陽が当たるよ
う下草刈りや枝打ち間伐をおこない、建築
材料として伐採する最後まで、ひたすら手
をかけるのだ。

「なんてスケールの大きな仕事だと思
いました。手入れが行き届いた山仕事に接し
て、あらためて山主の愛情がこもった木材
を大切に使用したいと思いましたし、この山
主の木材は、自信をもってお客さまに供給
できると確信しました」

設計課在籍の杉山さんだが、モデルハウ
スを訪れた見学者の案内から、家の引き渡
し後のフォローも担当している。最近の特
に現場に出ることが多い。プレカット加工
前に構造材である土台、柱、梁などの木材検
査をおこなうなど、木材をみる機会が多
くなったという。

地産地消の家

「いばらきの家」で使われる木材は、茨城
県北部の地域で収穫される。江戸時代から
造林の歴史があり、ここから取れる材木は、
茨城県内最高峰の八溝山にちなみ八溝材と

呼ばれてきた。土地柄、雪や台風の影響を受けにくく、木のねじれが少なく曲げに強い、目が詰まって木目が美しいなどの特性をもつ良材という。

八溝材のよさと魅力を熟知し、地域の木材を使用することで、山の森林循環を促進することができる。それは、地域の自然を守ることもつながっていくのだ。「いばらき



茨城県南木造住宅センター「いばらぎの家」モデルハウスは地産地消のシンボル。創業は1976年。一貫して県産木材を使用。県内には木材を扱える職人がまだ健在だという

の家」では、茨城県産材の産直ネットワークを構築して、製材所から直接木材を仕入れるルートを確認した。生産者と住まい手ま
で、お互いが顔の見える関係を築き「安心・安全な家づくり」をおこなっているのだという。

製材されたばかりのスキの表情を見に、建築中の工事現場へ行ってみた。

シヨールームと事務所を兼ねた非住宅で、外壁にはスギ材を横張りにしてあった。スギは縦に真つすぐ伸びるのが特徴だから、通常は縦張りにするものと思っていたが、横張りは、まったく木の印象が異なって見えて面白い。

白っぽいスギと赤っぽいスギとがある。「スギの丸太を輪切りにすると、芯に近い真ん中の部分が赤っぽい色（赤身）、その外側が白っぽく（白太）なっています。白と赤が混ざった材は源平といえます。ここの外壁には、源平が使われています」と教えてもらった。

赤身は活動を終えた細胞なので、水分を吸収しないから、水に強いうえカビが生えにくく耐久性が高いとされる。

辺材の白太は、美しい。年輪が緻密だから板にすると強度もある。そのうえ、空気中の水分を調整する機能に富むので、寝室の床にもってこいだという。

「茨城県産材のよさを生かすデザイン、木の特性を発揮させる施工を常に心がけています」

現場には、プレカット加工が終わり納材された材がたくさん積んであった。リフォーム工事の現場で柱や化粧材に使うというスギ材を、一本一本、真剣なまなざしで確認する杉山さんだ。

木の魅力を伝える

木の優れた点を多くの人に知ってほしい

と想っていた矢先、茨城県産材の利用を増やすPRのため、2019年に「いばらき森林ガール」が誕生した。2人は林業、3人は建築業に従事する女性で、合計5人のメンバーだ。

「森林の循環は、植える↓育てる↓伐る↓使う、そして、また植えること。日々、森林を守り育てている人と交流が持てたことで、より一層茨城県産材の魅力をつなげたいと思うようになりました。私も彼女たちに負けない愛情を注いで、木を生かす努力を続け発信していきたいと思っています」

杉山さん自身、「自分で設計して木の家を建てたいです」と語る。仕事に携わるなかで、茨城県産材の無垢の家が、どのように経年変化していくか、色味が変化し風合いを増していくのを見てきた。

「時を経て美しさを増す姿は無垢材だからこそ魅力だと思っています」

また、無垢材そのものが持っている断熱性や調湿性が、体にも優しいことを実感している。スギやヒノキが、夏は湿気を吸ってさらりと、冬は湿気を吐くことで、室内の湿度を保ってってくれて過ごしやすい。茨城県の豊かな気候風土に適した無垢の木の家。その心地よさはほかには替え難いものがあるのだ。

「二人でも多くの方に、木の家の心地よさを知っていただけたらと願います」と杉山さんが結んだ。

（片柳草生／文 宮下直樹／撮影）